

ブルードンを通して見たる

交易に於ける社會主義的組織 (一)

手塚 壽 郎

社會主義と同じく、労働を原因とせざる所得の存在、人間によりての人間の搾取を除かうと欲しつゝも、所謂社會主義の方法に據ることなく、言ひ換ふれば貸本の私有を廢止することなく、現在に於けるが如き生産の組織を維持せんとする思想のシステムを、私共はこゝに社會主義的組織と名けたい。

ブルードンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

此らの組織を主張する者にとつては、富の不公平なる分配の魔術は現在の交易の制度のうちのみ見出される。不公平なる分配の原因をなすものは、金屬貨幣即ち商品たる貨幣である。貨幣は之を所有する者をして、貨幣を必要とする者より搾取をなすを得せしむるものである。だから労働を原因とせざる所得、人間による人間の搾取を除かうとするならば、只此暴虐なる貨幣を倒せばよい。デッサン教授の言を借り來るなら、此らの社會組織改造論者は「貨幣の葬式」*Les funérailles de l'argent* を營まんとする者である。(註一) 此葬式を營まんとする社會主義的組織を、私共はこゝに交易に於ける社會主義的組織 *Le Système socialiste d'échange* 又は交易社會主義 *Der Tauschsozialismus* と呼ぶ。(註二)

(註一) *Avant-propos de Deschamps aux Systèmes socialistes d'échange de M. Aucuy, p. II.*

(註二) 交易社會主義の定義の詳細に就いては、Wegelin, *Tauschsozialismus und Freigeld*, pp. 1—3 参照。

私の此稿が目的とする所は、ブルードンを通じて此交易に於ける社會主義的組織の難點が何處にあるかを考へんとするにある。まことにかゝる考究をブルードンを通して爲すに依りて、私共は最もよく此組織の難點を把握するを得るであらうと思ふ。けだしブルードンの著作と計畫とに現はれた變遷は、それ自ら交易に於ける社會主義的組織の難點を指摘せる批評的意義をもつからなので

ある。

二

ブルードンが價值（彼の所謂價值を意味す）に關する問題を捨て、單に、交換の媒介物としての貨幣の廢止の問題を解かんとしたのは一八四八年であり、此變化を促せるは當時の佛蘭西の歴史的事情である。だが彼の此交易に於ける社會主義的組織に含まるゝものゝ論理的發展は、彼をして再びその所説を變ぜしめ、再び當初の所説に歸らしめた。故に私共は先づブルードンの最初の價值觀を概觀するを便利なりと思ふ。次に私共は、ブルードンの此最初の思索の方向の轉換を促したる歴史的事情と、彼の新なる交易に於ける社會主義的組織を考察する。更に私共は此システムのうちに含まるゝものが論理的に發展して一八五五年の計畫となりブルードンが再び當初の所説に歸らざるべからざるに至つた所以を尋ねる。

三

價值に關するブルードンの最初の説は誰人も熟知するが如く、一八四〇年の *“Qu'est-ce que la*

ブルードンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

propriété”と一八四六年の“Les contradictions économiques”とに展開せられ、辨證法の跡を止むること鮮明である。だが其辨證法はヘーゲルより得られたのではない。マルクスによれば、ブルードンはヘーゲルの方法を經濟學に應用せんとしたが、辨證法の眞の性質を捉へ得なかつた爲に、其試は遂に詭辯に終つたと云ふ。マルクスは云ふ、「もとよりブルードンは準ヘーゲル的言句を投げつけて佛蘭西人を驚かさんと欲したのである。……ヘーゲルが宗教、法律に就て爲せるものをブルードンは經濟學に就てなさんとする。」(註一)「然し彼は眞の科學的辨證法を理解してゐないから、詭辯に達し得たに過ぎない」と。(註二)ブルードン自身は此マルクスの批評を單に嫉妬心の現れに過ぎぬと輕蔑する。ブルードンが所藏せる一八四七年の「哲學の貧困」の第百〇六頁にはブルードン自らの手に依つて次の如く記されてゐると云ふ。「マルクスの著述の眞の意味は、予が彼の如く考へ、且つ予がそれを彼より先に云へるを、彼が無念に思つてゐると云ふことである。」(註三)

(註一) Marx, Misère de la philosophie, éd. Giard, 1922, pp. 117 et 121.

(註二) B. Malon, K. Marx et Proudhon, Revue Socialiste, janv. 1881, cité par R. Picard, Introductions aux Contradictions économiques, vol. I, p. 23.

(註三) La Phrase relevée par R. Picard, Les Contradictions économiques, éd. Rivière, Introduction de Picard, p. 22 en note. Cf. Ibid., t. II, p. 418.

ブルードンがヘーゲリアスムの盛なりし環境のうちにおいて、彼の廣い好奇心を以て獨逸哲學の心髓に觸れんとしたるべきは疑を容れぬ。けれ共彼がヘーゲリアンたらんことを欲したか否かは別問題であつて、マルクスの如く、ブルードンを、ヘーゲルの辨證法を經濟學に應用せんと試みた者と考ふるは不當である。ブルードンは其著作“De la création de l'ordre dans l'humanité”をアツケルマンに送り、それに添へたる一八四三年九月廿日付の手紙中に次の如く云ふ。「貴下は此書に於て貴下ら獨逸人の形而上學とは異つた新しい、簡單明瞭にして豊かなる形而上學を見出さるべし。小生が以前に公にせる著作は、總て之を研究及び練習と看做されんことを望む。…小生が小生の文學上及び科學上の經歷を始むるは此書よりなり」と。(註一)だからブルードンが思想家としての生涯を始めんとせるときには、彼は新しい形而上學を見出せりと信じ、且つ之を獨逸のものより簡單にして明晰、實際的應用をなし得べきものとしてそれに對立せしめてゐたのである。また彼は一八四五年一月十九日付を以て、執筆中の「經濟的矛盾」に就き一書を送つて云ふ。「小生は過大の仕事企てたるため、望みしが如く捗取る能はず。小生は今六個——七個となるやも知れず——の連續論文を起草中なり。第一編は既に四百頁に達し、他編も引續き執筆せらる。小生は最後の二編に於て辨證法の何ものたるやを佛蘭西人に示さんと欲す。そは社會的背反の觀點よりせる經濟學の一般的

批評なり。獨逸にては、總ての學者が既に知らるゝ方法論的形式に従ひ、自ら用うる所の論理的方法を指示するに反し、佛蘭西に於ては人々は互に了解し合ふことなく、永遠に妄論を行ひつゝあるなり。小生が *Théorie sérielle* 又は *Dialectique sérielle* なる名稱の下に論辯の法を提唱したるは、理性に對する此訓練の必要を感じたるが故なり。ヘーゲルは既に此理論の特色ある構成を與へたり。小生が此冬に到りて知るに至りし知識によれば、小生の説をよく理解する獨逸人少からずして、彼らは小生の著作を賞讚し、且つ小生の説は既に彼らの國に存すと云ふ。小生は今小生の形而上學とヘーゲルの論理との間に類似ありや否やを云ふ能はず。小生は未だかつてヘーゲルを見ざればなり。されど小生が次の著作(「經濟的矛盾」を指す)に用ふるものは彼の論理なりと小生は信ず。然れども彼の論理なるものは小生の論理の特種なる場合、即ち云はゞ小生の論理の簡單なる場合に過ぎざるなり」と。(註二) 此らの手紙は明にブルードンの意志を示すものであり、而してブルードンに對するマルクスの批難の根據なきを示するに足るものであらう。

(註一) Proudhon, *Correspondance*, t. I, pp. 102—3.

(註二) *Ibid.*, pp. 175—6.

要するに事實はブルードンが論辯の規律としての辨證法を案出しようとしたと云ふことなのであ

る。かゝる野心は必ずしも十九世紀初頭の獨逸思想家に特有なものではない。辨證法は總ての論證的思想の基礎たるものであつて、プラトーンの辨證法もスコラ派の方法も何れも同じ必要を充さんとするものに他ならぬ。(註一)サント・ブアーズが、總てのものには正と反とがあるものであつて、雙方に眞理あることを發見するにはカントも要らねば、ヘーゲルも要らぬと云つたのは正しい。サント・ブアーズは云ふ。「もし獨逸的なる假面を取り去れば、プルドンの方法にはそれ自らのうちに簡單にして大膽なるものあるのみである。それはヘーゲルの *Autonomie* なる用語なくとも濟む。……プルドンは其方法を自由に佛蘭西流に用ひ得べく、我らは其起源をバスカルまで求め得よう。バスカルは人間なる者の矛盾を擧ぐるを好んでゐた。バスカル曰く『人間が自ら不可解なる怪物たることを解するに至るまでは、予は人間を揚げたり、下げたりする』と。然し大膽にして複雑なる改造家(プルドンを指す)はかくはなさぬ。彼は其方法が科學たり、新なる科學たることを標榜する」と。(註二)

(註一) R. Picard, *Introductions aux Contradictions*, t. I, pp. 26—7.

(註二) *Sainte-Beuve, Proudhon*, pp. 222—223. Voir aussi la note dans p. 223.

故に私が先にプルドンの「經濟的矛盾」に於ける彼の價值説は辨證法の跡を止むること鮮明で

プルドンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

あると云つたのは、それがヘーゲルの辨證法の跡を止むること明なりと云ふ意味ではない。マルクスが、ヘーゲルの歴史的辨證法とプルードンの道徳的辨證法とは何らの類似はあり得ない、プルードンの辨證法は善と悪との獨斷的區別をなすことに過ぎぬと云つたのは正しい。(註)

(註) R. Picard, *Introductions aux Contradictions économiques*, p. 30. 一八四〇年の“*Qu'est-ce que la propriété?*” p. 202 にも既に辨證法が用ひられてゐる。Berthod は之をヘーゲルより來りしものと解釋してゐる。(Berthod, P. J. Proudhon et la propriété, p. 46 en note.) 然し“*Lors du voyage de Marx en France (logé chez Proudhon à Besançon), ils passaient les nuits à discuter philosophie et économie politique, Marx l'initiant aux mystères de l'hégélianisme.*” (M. Raléa, Proudhon. Sa conception du progrès, p. 18.) を事實なりとすれば、Berthod の記述は許し難い。尙此問題に就てはプルードンと Grün との関係も考へねばならない。故にヘーゲリアニズムとプルードンとの関係の決定的研究を、私は他日に殘す。

プルードンはかゝる辨證法を價值論に携へ來りて、使用價值と交換價值の矛盾を説くのである。或百姓が其家族と共に食ふべき小麥二十俵の收穫を得れば、十俵しか得なかつたときの二倍の富を有してゐる譯である。五十米の布を織つた家族は二十五米の布しか織らなかつたときの二倍の富をもつてゐる。然るに對外關係の觀點からしても、同様に考ふるならば、それは全く誤である。全國の小麥の收穫が二倍であるとする、此百姓は二十俵を賣つても、十俵しかとれなかつたときの賣上を得られない。同様に五十米の布は二十五米の價額にさへ賣れない。利用の量は増加し乍ら、

價値は減ずる。生産者は儲けんとして貧乏になり得る。また同じ現象が反對の意味に發生し、生産者は利益を受けるけれ共、消費者は大なる打撃を受ける場合もある。凶作に當りて穀物の價格が不自然な高さに達するが如きである。〔註一〕これ明に「利用價値と交換價値との驚くべき矛盾である。〔註二〕然し嚴密に云へばこれは矛盾ではない、*antinomie* なのである。矛盾は *nullité* であるが、アンチノミーは眞理の前徴である。數學では一つの命題が偽であると證明せらるれば、反對の命題は眞である。其逆もまた眞理である。けれども經濟學ではさうではない。例へば所有權は其結果から見て誤であるとしても、其反對の共產制が眞理であるわけではない。〔註三〕そこには此ら二つの背反せる概念をより高い *Ordre* の第三のものに融合する綜合がある。同じように價値に於ても背反せる利用價値と交換價値とを綜合する所の價値がなければならぬ。それが即ち構成せられたる價値である。「使用價値と交換價値、此ら二つの衝突せる概念から、構成せられたる價値 *La valeur constituée* 即ち絶對價値に至るとき、價値の概念に何が起るであらうか。そこには二つの概念が互に吸収し合ひ滲入し合ふ關係、云はゞ接合關係がある。そして残さるゝものは消極的性質を失へる積極的性質のみを有する高位の化合體である。〔註四〕

(註一) Proudhon, *Les contradictions économiques*, t. I, (éd. Rivière) p. 94.

ブルードンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

(註二) Ibid., p. 95.

(註三) Ibid., p. 99.

(註四) Ibid., p. 115.

然らばブルードンの絶對價值とは如何なるものであるか。

「社會は無數の物を生産し、それらの享樂は社會の幸福となる。此幸福は生産物の量に比例して増加するのみならず、其種類(品質)及び割合に比例して増加する。……生産物の豊富、種類、割合は富を構成する三つの條件である。

「然し此巧みなる、そしてこれ無くば人間の労働の一部は失はれ、即ち無利用となり不調和となるほどかくも必要なる此割合は如何にして定められるか。

「神話にあるプロメテールは一日平均十時間を労働に、七時間宛を休息及び娛樂に投ず。プロメテールは其活動から最も利用の多い結果を收めんとして、各消費の對象の生産に要する苦痛と時間との記録をとつた。然し此らを教へてくれるものは經驗のみであり、而も此經驗は全生涯に互るであらう。労働し、生産し乍ら彼は多くの誤算もする。然し結局に於て、彼は労働すればするほど、彼の幸福は精鍊される。労働者の最初の教育が終つて、爲す所に秩序があるようになれば、労働するこ

とは苦痛に非ずして、生活することであり、享樂することゝなつて來る。だが労働の愉快は規律を破り得るものではない、それは此規律の結果に過ぎないのであるから。

「プロメテールはどの生産物が何時間の労働を要するかを知り、また費用を増加して此らの生産物を増加すれば富が増加するものなるを知る。故に彼は費用少きもの即ち最も必要な物より生産を始め、其生存を確保しようとする。此確保が動かし難いものとなれば、次に彼は奢侈品に赴く。此場合にも彼にして聰明なる限り、費用の自然的度合の順列に據りつゝ彼は進むのである。」社會もまたプロメテールと同じく、「先づ費用の少いもの従つて必要な物を生産する。」(註)

(註) Proudhon, Les contradictions économiques, t. I, pp. 108-9.

右の如くにして生産せられたる必要な物は富 La richesse と稱せらるゝ。そして價值とは個々の生産物が社會の富に對する比例的關係を云ふのである。「Figurons-nous donc la richesse comme une masse tenue par une force chimique en état permanent de composition, et dans laquelle des éléments nouveaux, entrant sans cesse, se combinent en proportions différentes, mais d'après une loi certaine: la valeur est le rapport proportionné selon lequel chacun de ces éléments fait partie du tout.」だから價值の測定をなすことは、價值の尺度の尺度を求めて、價值を計ることではない。「價值の尺度を求む

ることは無意味である、價値の尺度なるものが無意味であるから。我らが求むるは、生産物が社會の富のうちに比例を保つ法則其ものである。」(註)

(註) Proudhon, Les contradictions économiques, t. I, p. 106.

ところで與へられたときに於ては、一國の富を形成してゐる「富の比例即ち價値を我々は統計又は評價 inventaires により經驗的に知り得ること、又は少くとも其近似値を知り得ること、化學に於て實驗と分析とにより物の組成を知り得るが如くである。此方法は、價値の測定に適用しても、不適當であるべき何ものも否んでゐない。而も此方法によれば價値の問題は只計算の問題となつて仕舞ふ。だが此方法が如何に興味あるにせよ、それが我々に教ふる所は多くはない。なぜなら一方に於ては此比例は絶えず變化するし、他方に於て公衆の富の統計は、これが作られたる時と所に於てしか價値の比例を與へず、従つて此特種のものからしては富の比例の法則を導き出せないからである。

「けれどもこゝで經濟學と化學と相異なる點がある。經驗の力によつて頗る正確な比例を發見した化學者は、かゝる比例が如何にして且つ何故に存在するかも知り得なければ、また此らを決定する力も知り得ない。之に反して經濟學者は經濟的には直接には價値の比例の法則を知ることが出來ぬ

が、此比例を發生せしむる力を知ることが出来る。……此力は労働である。〔註一〕私共は、富の生産に要する此労働の量によりて富の比例關係を知ることが出来る。換言すれば富は其生産に要する労働の量により比例關係をもつてゐるわけであつて、従て價值は労働によりて構成 *constituer* せらると云ふことが出来る。此労働によりて構成せられたる價值こそ商工業の氣まぐれの影響を受けぬ所の絶對的價值である。然し此絶對的價值はある所の價值と解せらるべきではない。ブルードンに於ては價值を構成し、富の比例を定むるものが労働でなければならぬのであつて、價值の原因が労働であると云ふのではない。價值の原因をなしてゐるのは利用である。〔註二〕絶對的價值は此利用即ち使用價值とこれに背反せる交換價值とを綜合せるものである。ところで富の比例を定むる労働はブルードンによれば、事實に於ては必ずしも等質ではないが、等質と見做されねばならぬのである。「労働には變化がある。プロメテは常に同様に好んで労働するわけではない。彼の熱心の程度生産力の程度は時に或ひは高潮に達し、時に或ひは沈滞する。然し變化する總てのものと同じく、労働にも平均的中位があるから、一日の労働は他の一日の労働に等しいと云ふことが出来る。もとより或時代の生産物と他の時代のそれとを比較すると、かつて一日を要したものが其幾萬分の一で作らるゝ場合もある。然し集團者の生活も個人的生活も分解せらるべきものではない。各の一日が

相異してゐるとしても、それらは結合してゐるから、分解せらるべきではない。一生涯を通ずれば苦痛も快樂も人々に共通である。もし仕立屋があつて一日の價値を交換に提供し、機械工の十日分の價値を得て消費したとすれば、機械工は仕立屋の一日の生命に對し交換に已に十日の勞働を與へたことになる。一時間で書き上げる書類を、公證人は百姓から十二フランもとつて書いてゐるが、これはまさしく一日の生命と十二日の生命との交換である。交換に於けるかゝる不平等、不公平こそ貧乏の最も有力なる原因である。」(註三)

(註一) Proudhon, *Les contradictions économiques*, t. I, p. 107.

(註二) *Ibid.*, p. 113.

(註三) *Ibid.*, pp. 129—130.

要するにブルードンは、かくの如く等質なりと認められねばならぬ所の勞働の量に依りて價値を定め、背反せる使用價値と交換價値とを綜合せる構成價値を制定し、之を交換の法則としようとする。ブルードンによれば、此構成價値が交換の法則となるとき、交換の正義 *Justice commutative* (註一) が實現せられると云ふ、蓋し「社會に於て正義(交換の)とは價値の比例に他ならないから」である。(註二)だが私が他の機會に證明したように、需要と供給との關係を離れて價値を定むるなら

ば、それは自由競争下に於ては必然的に生産と消費の適合を不可能ならしめざるを得ないであらう。それは國家が總ての生産を獨占し、且つ各人の消費額を命令するときのみ、此適合を可能ならしめる。すなはち共產主義化は、投下労働の量によりて財の價值を定めんとするシステムの缺くべからざる條件である。(註三)だがブルードンは、此條件を許容すべく、自由を求むるパッションが餘りに強かつた。ブルードンは強く平等を求め、また同じように強く自由を求めた。「彼の不斷の理想は、自由を犠牲とすることなく、出来るだけ多くの平等を得んとするにあつた。」(註四)一切の物の共產主義化に彼が忍を得べきでないのは明である。既に一八四八年に於て彼は、投下労働を以て價值の決定の法則としようとする主張を捨て、仕舞つた。A. Desjardins の傳ふる所に據れば、一八四八年二月廿六日、銃を携へる四人の者がブルードンの居室を襲ひ、彼の矛盾とデレツタンチスムより出て、いつに至りて *Les contradictions économiques* に約せし綜合的解決を與へんとするかを詰問したと云ふ。また此時四人は、近く彼らが發行し創むるであらう所の日刊新聞紙 *Le représentant du peuple* の主筆たらんことをブルードンに迫つたのであるが、ブルードンは之に應ぜずして、只評釋の類のみの執筆を約したと云ふことである。(註五)然し此時の革命に連なる諸々の事變に刺激せられ、併せて此約束を果すためにブルードンが考へて、*Le représentant du peuple* に連載せ

るシステムは、Les contradictions économiques に約されたのとは徑庭あるものとなつてゐるのである。

(註一) Proudhon, Les contradictions économiques, t. I, p. 130

(註二) Ibid., t. I, p. 108

(註三) 拙稿、オウエンがなせる金屬貨幣廢止の試みと其失敗の意義(社會事業特輯、オウエン七十年記念論文集所載) 參照。

(註四) A. Berthod, Les tendances naitresses de P.-J. Proudhon, La Revue socialiste, février 1909, p. 121.

(註五) A. Desjardins, P.-J. Proudhon, t. I, p. 89.

四

一八四八年の佛蘭西の政治的革命的動因をなせるは一八四六年及び一八四七年の財政的經濟的恐慌である。此恐慌は先づ英佛に其端を發し、露獨白耳義を襲ひ、間もなく和蘭及び奧太利を襲へる極めて一般的恐慌であつた。従つて其原因は種々であらうが、之を佛蘭西に限つて見るならば大凡そ三つの一般的原因と一つの特種的原因があり得たと思はれる。

一般的原因。其一。ロアル河アルリエ河の氾濫、天候の不順等に因り、一八四六年の收穫は著しき不足を示し、小麥の價格は一ヘクトリツトルに付平均三十法、或地方にては四十八法に騰り、

それがために運送中の小麥を掠奪する者、地主を殺害する者など頻りに出で、政府はこれが對策として穀物の輸入税の免税を行ひ、小麥の輸入の便を計つた。ために小麥の輸入激増し、其代金の支拂に多額の正貨が流出したことは、一般的原因の一である。マリオン教授の計算によれば佛蘭西銀行の正貨準備は、一八四五年末より翌年末までに、一億八千七百萬法から七千百萬法に減じたと云ふ。(註一) 其二。ルイ・フイリップ政府は各地方に布設せらるべき數多の鐵道の建設を許可せしがゆゑに、鐵道會社の設立相次ぎて起り、それらの株式募集には外國人にして應募せる者が少くなかつた。然し此らの外國人の目的は、應募せる株式を高く轉賣して利益を收めようとするにあつた。Horace Say が傳へてゐる所によると、此當時の「英國の資本家は此ら平價の佛蘭西の株式に應募し、これらを、拂込後高く轉賣して、多くの打歩を利得した」と云ふ。(註二) 従て此原因により多額の正貨の流出が現はれ、同時に巨額の資本が鐵道に依りて吸收せられた事實は争ひ難い。他方農業はかくして鐵道によりて資本を奪はれると同時に、都會にて此ら鐵道株に附隨して行はれた投機熱のたに、更に大いに資金の窮乏を告げたのであつた。また正貨の流出と資本の固定とは銀行の準備金を減少せしこと甚しく、銀行の基礎を危からしめた。其三。國庫の歳出大いに膨脹し、一八四〇年十一億七千九百萬法なりし歳出が、一八四六年には十五億百萬法となり、従て民衆の租稅負擔

が過重となり、民衆の不満が一般的になつた。(註三)

(註一) M. Marion, Histoire financière de la France, t. 5, pp. 224—5.

(註二) Horace Say, Journal des économistes, 1848, cité par M. Ancy.

(註三) Ancy, Les Systèmes socialistes d'échange, p. 121.

特種的原因。右の三つが一八四七年の恐慌の一般的原因であつたが、此恐慌は直接には特種なる事情、即ち當時まで集積的に増し來れる銀行經營上の弊習を動因としてゐる。佛蘭西にては一七九六年 Caisse des comptes courants と名けられ、主として商業銀行の職分を盡す所の銀行が設立せられたが、それは一八〇〇年一月 Banque de France と改稱せられ、且つ其年の七月銀行券發行の特權を與へられたが、更に一八〇三年銀行券發行の獨占權を與へられた。(註) けれどもこゝで割引せらるゝ證券は三人以上の署名を具へ、九十日の期限を超えず、且つ巴里及び十五ヶ所の支店所在地向けのものに限られた。然るに La Restauration の政府は十箇所の地方銀行にも銀行券發行の特權を賦與したのである。但し此らの地方發券銀行は、二署名の證券を割引する權利も、支店を設くる權利もなく、また所在地外の都市にて業務を行ふことが出來ず、小額の銀行券を發行し得なかつたが、然しこれらが佛蘭西銀行の特權と異なるだけで、此ら地方發券銀行は他に何らの制限を受けず、

銀行券發行額と準備金額との比例に就ても何らの拘束を受けなかつた。されば此らの地方發券銀行は、充分なる準備金を置くことなく、また僅かに二千三百萬法の資本金を有つに過ぎないのに、一億二千萬法の銀行券を發行してゐる（一八四八年）と云ふ奇觀を現出したわけである。尙一般銀行は預金者に對し一覽後數日拂の受取證を發行するを常とし、從て此らの預金は直ちに支拂はざるべからざる負債であり乍ら、銀行は之を長期の貸付、割引に用ふるを常とした。斯様にして地方に於ける銀行の流動負債は著しく増加したるが故に、恐慌に面接すれば此ら銀行は其負債に伴ふ危険を防止せんがために、一切の割引を停止し、發券銀行が銀行券の即時的兌換を停止するは已むを得ない。一八四八年に起りたるはまさしく此現象なのである。

(註) Germain Martin, *Histoire économique et financière de la France*, pp. 311—2.

かゝる一般的原因と特種的原因とは二月革命を導火線として經濟的大恐慌となり、革命の日の翌日には一切の商取引は止み、取引所は閉鎖せられ、多くの銀行は一切の割引を停止する旨を告示した。商業證券の割引を受けて債務を辨濟せんとする者はいづれも其目的を達することが出来なかつた。恐怖は著しく大であつた。銀行家も工業家も商人も共に相會して對策を熟議したと云ふ。三月八日には三千の商工業者銀行者が行列をなして、市廳に押し寄せ、三箇月のモラトリアムの施行を

請願した。それにはセーヌ縣商事裁判所の職員の支持さへもあつた。然し此方法は佛蘭西銀行と地方發行銀行の破産を生ぜしめねば已まない、蓋し其収入はモラトリアムによつて延期せられ乍ら、銀行券の即時的兌換が停止せられてゐないからである。そしてこれは同様に國庫の破滅であらねばならぬ。そこで此請願は採用せらるゝことなく、モラトリアムは三月三日の布告によつて與へられた三月十三日を以て打切りとなつた。(註一)けれ共恐慌が擴大するに伴ひ、動搖は益々甚しく、様々の要求者が諸方から政府に集つた。ナント市の會計吏は七十萬法の送金方を中央政府に要求し、十日書を送つて曰く、「會計の組織化を一時間遅るれば遅るゝ毎に、新なる異變が迫つて來る。……嵐が來た。此嵐は恐しく強い。」ナント市に於ける通貨の不足は——恐らくフランス中の他の都市でも同様であらうが——多大の不安を生ぜしめ、事業を停止せしむる恐がある。巴里より通貨を受くる能はざるや」と。ルーアン市の一事業家もまた同様に書が大藏省に送りて曰く、「當地の商人には尙銀行に預けてある資本があるのを、私は確信する。然し何れの銀行も預金の引出しに壓しつゝさされてゐるから、銀行は商人の資本を返還することが出來ない。此まゝ十五日も経てば、一切の事業は停止するに至るであらう。當市の工業家は今後數日間を支ふべき原料を有してゐるに過ぎない。今は生産物を賣ることも出來ねば、原料を買入るべき資金もない。彼らは事業を停止するほかはな

い。……だから我市に適當なる資金の送付方を盡力せられたい」と。第二信では此事業家はナント市のために二百萬法の融通を要求してゐる。(註二)またノール縣の會計吏は次の如き書を大藏大臣に送つてゐる。「……通貨缺欠して、取引は不可能となつてゐる。銀行家の金庫も商人の金庫も證券で充満してゐる。然し通貨は少しも見付からない。今にして政府が援助をなさぬならば、一切の事業は停止すると見ねばならぬ。五十萬法の必要がある」と。(註三)

(註一) Garnier-Pagès, Histoire de la Révolution de 1848, éd. Degorce-Cador, t. II, p. 79.

(註二) Ibid., pp. 84—5.

(註三) Ibid., p. 85.

かゝる急迫せる事情に直面しては、假政府は二つの對策を講じたのである。

一、私設銀行が引受けざる證券の割引を目的とする信用機關を諸地方に設けたること。

二、佛蘭西銀行及び地方の發券銀行の兌換券の兌換を停止し、之に強制通用力を與へたこと。

假政府は、私設銀行が引受けざる證券の割引を目的とする信用機關として、先づ割引銀行 *Les comptoirs d'escompte* を設立せんとし、三月七日此機關の根本的基礎に關し次の如き閣令を公布した。「民間の信用が酷く障塞せられてゐる場合には、力を結合して總ての者に信用の利益を與へまた

勞働を保證する所の有益なる結合の一の實例を示すは肝要なことである。市民が自らの間に一種の相互的保證の制度を作らんとして結合の欲求を感じてゐる場合に、國家が之に適當に干涉し、參加するは、國家の主要なる義務の一である。……由りて各商工業都市に、信用を擴張し、其利益を一切の生産者に及ぼすを使命とする國立割引銀行を置く。……其資本の三分の一は應募者の出資する通貨とし、三分の一は各都市の出資する市債券とし、他の三分の一は大藏省證券とし、國家の出資とす。〔註一〕其業務は佛蘭西銀行の嚴重なる監督の下に行はれ、且つ兌換券發行の業務は禁ぜられた。三月十九日逸早く業務を開始したる國立巴里割引銀行を魁とし、ナント、ポルドー、ランス、ミールウズ等、割引銀行の設立せらるゝもの相次ぎ、五月にはそれらは既に四十四に達したと云ふ。〔註二〕次いで假政府は此割引銀行の作用を補充するために保證局 *Les sous-comptoirs de garantie* を設けんとし、三月廿四日それに關する閣令を公布した。それには次の如く記されてゐる。「國立割引銀行に關する一八四八年三月七日の閣令により、此らの銀行は少くとも二人の署名ある證券に非れば割引をなさない。然るに多數の小商人、小農工業者は此第二の署名を得ることが困難であり、從て彼らは此ら銀行の與ふる援助の利益を奪はるゝが故に、假政府は閣令を以て、國立割引銀行の存在する都市に於ける地方自治體又は商工業の團體は農工商業者と國立割引銀行との仲介者となり

て信用を容易にし増加するを目的とする保證局を設けることを得、と定む。「保證局は、倉庫證券
其他の證券又は商品を擔保として、商工農業者の直接保證、手形保證又は裏書をなし、此らの人々
をして割引銀行の割引を受くるを得せしむるものとす。」「保證局は株式會社とし、株式の應募數の
如何に拘らず其業務を開始するを得。」巴里には此閣令に準據して十四の保證局が設立せられたが、
重要なる職分を盡したのは土木建築請負業者の間にあつたものゝみである。(註三)假政府はまた保證
局の運用を完全ならしむるため、保證局に關する閣令の前後に、寄託倉庫 *Les magasins généraux*
の設立に關する閣令を公布した。それには次の如く記されてゐる。「工業家をして直ちに其商品の代
價を利用するを得せしむるため、巴里及び必要ある他の都市に寄託倉庫を設く。商人、工業家は之
に原料及び商品を寄託することが出来る。……寄託倉庫は、寄託を受けたる物品に對し、専門家の
鑑定による價格を示したる受記證を交付する。」「此受記證を受けたる者は寄託の目的物を、裏書に
よりにて移轉することを得。」また「此受託證の所持人は管轄地域内の國立割引銀行又は保證局に、擔
保として之を預け入るゝことを得。此擔保は、國立割引銀行の場合には第三の署名に代り、保證局
の場合には第二の署名に代るものである。」(註四)

(註一) Garnier-Pages, op. cit., t. II, p. 80.

ブルードンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

(註一) Marion, op. cit., t. 5, p. 350.

(註三) Ibid., p. 251.

(註四) Garnier-Pagès, op. cit., t. II, p. 82.

假政府は緊急の對應策としてかゝる信用機關を設けたのであつたが、同時に之を永久的常態的機關とする積りであつた。然るに假政府はまた一時的對策として、佛蘭西銀行及び地方發券銀行の銀行券に強制通用力を與ふる方法を採つた。革命の前日までは佛蘭西銀行の地位はまことに理想的であつて、其準備金は二億二千六百萬法に達し、發行兌換券額に近かつたと云はれる。(註一)革命の勃發を見るや佛蘭西銀行は恐慌の擴大を防止するため、大膽に割引と兌換の要求に應じ、二月廿六日より三月十五日までに巴里にて一億一千萬法を割引し、地方にて四千三百萬法を割引した。また銀行券の兌換の結果三月十四日には準備金は七千萬法に減じたと云ふ。(註二)三月十五日一日にて兌換額は一億八百萬法に達し、準備金は五千九百萬法を残すに過ぎなかつた。此うち四千五百萬法は國庫の所有であるから、残額は一千四百萬法に過ぎず、これと預金支拂準備金六千三百萬法とを併せたる七千七百萬法を以て、佛蘭西銀行は流通せる兌換券二億六千萬法と預金八千五百萬法との支拂をなさねばならなかつた。總裁ダルグー氏は大藏大臣の下に走り、窮狀を訴へ、僅かの正貨が残つ

てゐるが、これは國庫の金である。これは巴里の食糧購入に、軍隊に、労働者に、公益事業に缺くことの出来ない金である。萬事休す」と叫び、兌換券を法貨とする案を提出した。(註三) 政府は此案を採用した。かくて佛蘭西銀行は兌換券の兌換の義務を免れたのである。同一の特権はまた地方發券銀行にも與へられたが、一八四八年四月廿七日及び五月二日の法令によりて、銀行券の發行は佛蘭西銀行の獨占となつた。

(註一) Marion, op. cit., p. 247. 此記述を、先に引用せるマリオンの著書二二五頁の記述と併せ讀むとき、私は疑の出づるを禁じぬないが、今はマリオンの記述其まゝを記して置く。

(註二) Ibid., p. 247.

(註三) Garnier-Pagès, pp. 86—7.

假政府はかくの如き應急對策によりて佛蘭西銀行を救ひ、國民の破産を救ひ、商工農の流通資金を供給したのであるが、財政的經濟的危機は直ちに消散すべくもなかつたのである。従て財政及び信用機關の問題は盛なる論議の對象となり、新聞紙やクラブが切りに之を論じたるは勿論、市民の手になれる財政及び信用に就ての計畫、發明と稱せらるゝものが毎朝何百となく大藏大臣の手に郵送せられた。Garnier-Pagès が傳ふる所によると、或者はオルレアン家の財産を沒收賣却すべしと云ひ、或者は紙幣の發行に頼るべしと主張し、或者は租税の増徴によるべしと提案してゐたと云

ふ。ルイ・ブランが國立銀行の設立を提案したのも此時である。ブルードンが交易組織に關する計畫を考案せるはかゝる環境の刺激を受けてゐる。而して此計畫に現はれた思想は「經濟的矛盾」に現れてゐるそれとは同一ではない。(註) 彼の思想の此變化を生ぜしめたのは恐らくは一八四八年のかゝる環境なのであらう。

(註) 信用組織に關するブルードンの考案は一八四四年先づ新聞紙 *Le Représentant du peuple* に、次に新聞紙 *Le Peuple* に發表せられた。此らは集められて一八四八年三月廿二日 *Organisation du crédit et de la circulation et solution du problème social* と題する一冊とせられた。同年四月廿六日の *Le Représentant du peuple* に交易銀行の具體案が發表せられた。此らは何れも二種の全集中に收められてゐる。

五

然しかゝる雰圍氣のうちに出でたりとは云ひ、ブルードンの計畫は少くとも彼の心中に於ては一時的部分的對策たる境域を脱却せるものである。彼は「今我らが提唱するものは永遠に役立つのである」(註一)と云ひ、急進的にして決定的なりと自稱する永遠の解決を與へようとする。而して彼は此解決の方法に依りて自ら好んだ自由と正義とを實現し得べしと信じ、彼の自由への熱情は充されたるが如くである。此方法に於ては國家の干涉又は強制に頼ることなく、生産者の連帶精神を働か

せば足るのであるから、彼は之を以て當時の社會主義の計畫に遙かに優れりと思つたのである。サン・シモンの弟子らは國家を唯一の生産者にして唯一の給與者たらしめようとする。それは明に自由の否定である。カベールの共產主義は強制的分配の法則と組織とが無ければ存立し得ないのであつて、それはとりわけ人間の價値と力と尊嚴との意識——最も尊いものである——を訓練と献身の美名の下に湮滅する。(註二)ルクサンブールの組織は共產的、政府全能の獨裁的組織であつて、個人は全然社會に従屬し只社會より其存在の權利を受けると云ふ原理より出づる組織である。(註三)フリーエもコンシデランも其理想の農村を組織するために國家の手に依つて資金が與へらるゝのを待たねばならぬ。之に反しプルドンは國家の援助さへも受くることなく民衆自ら富と秩序とを作ること
を教へるのである。

(註一) Proudhon, *Solution du problème social*, éd. Lacroix, p. 90.

(註二) Berthod, *Revue Socialiste*, mars 1909, p. 225.

(註三) Proudhon, *De la capacité politique des classes ouvrières*, éd. Rivière, p. 102 et suiv.

(註四) Proudhon, *Confessions d'un révolutionnaire*, éd. Lacroix, p. 27.

同時に彼は其計畫のうちに正義の要求が充さるべきを信ずる。彼によると現代の社會は、一切の産業と一切の富とを互に共同し連帶せしむる流通なる一般的にして主要なる事實の上に構成せられ

プルドンを通して見たる交易に於ける社會主義的組織

てゐる。ところで連帶せしむる力は正義の原理——結局に於ては利益や必要より遙かに強い力を道徳の上にもつてゐて、従て總ての人間を結合せしむる——のうちに見出される。」(註一) だから正當によく現はれた所の流通は或意味に於ては正義の現はれてである。(註二) 社會問題——社會に於ける正義の問題は流通組織の問題である。「二月革命によりて提出せられた問題は先づ以て交換に於ける正義の問題である。流通の問題であり、信用の問題であり、交換の問題であつて、それは工場の組織の問題ではない。……ルイ・ブランの如く社會を頭で捕へようとするに代へ、又は所有權の如き尾で捕ふるに代へ、胸腹で引捕へ、工場、労働等を攻撃すべきではない。労働を攻撃するは自由を攻撃するに等しい。自由は人之に觸るれば觸るゝほど苦しまざる物である。それ故に流通及び交換の關係に打撃を加ふべきで、間接に其影響を通じて労働と工場とに達せねばならぬ。」(註三)

(註一) Proudhon, *La guerre et la Paix*, t. I, pp. 155—6.

(註二) Cf. Gide et Rist, *Histoire des doctrines économiques*, pp. 350—1 (éd. 1926)

(註三) Proudhon, *Solution du problème social*, p. 172.

だがブルードンはその計畫によりて流通の組織を如何にしようとしたのであるか。學說史家の多くは、ブルードンのシステムは信用を無償にて得せしむるそれ *Le système du crédit gratuit* である

と云ふ。けれどもプルードンの中心問題は貨幣なる交換の仲介者を用うることなく、交換をなす方法を求めんとするにあるので、信用の無料は結果に過ぎない。 “Nous avons chassé le dernier de nos rois, nous avons crié : A bas la monarchie, vive la République ! mais vous pouvez m'en croire, si déjà ce doute ne vous est venu, il n'y a en France, il n'y a dans toute l'Europe, que quelques princes de moins : la royauté est toujours debout. La royauté subsistera tant que nous ne l'aurons pas abolie dans son expression à la fois la plus matérielle et la plus abstraite, la royauté de l'or..... Il faut donc détruire cette royauté de l'or ; il faut républicaniser le numéraire.” (註)

(註) Proudhon, Solution du problème social, p. 112.

(未完)

